



こーひーぶれいく

インドで出会った謎と衝撃

青木 大

Aoki Dai

学生の頃から旅が大好きで、夏休みになると1か月くらい、バックパックひとつで海外をふらふらしていました。小田実の『何でも見てやろう』、藤原新也の『インド放浪』、沢木耕太郎の『深夜特急』、そして蔵前仁一の『ゴーゴー・インド』—そんな旅本をバイブルに、いわゆるバックパッカーとして各地を巡っていたのです。飛行機の格安チケットだけ取って、あとは気分次第。行き先も宿も、その日の朝に決めるような、そんな旅でした。

なかでも忘れられないのが、初めてインドを旅したときのこと。たしか1995年、デリーから入り、カルカッタで出国するというルートでした。インターネットなんてまだ一般的じゃなかった時代です。頼れるのは分厚い『地球の歩き方 インド』のみ。宿の予約もせず、気の向くまま、風の吹くままに旅していました。

インドでまず驚いたのは、人々の“押しの強さ”です。列車を降りて駅を出ると、リキシャワラー（人力車の車夫）が一斉に「ジャパニ、どこに泊まるんだ」「俺が連れてってやる」「うちのホテルは安くて清潔だぞ」と声をかけてきます。振り払うのが一苦労で、旅の洗礼をいきなり浴びたような気がしました。

そんな中、世界遺産のタージマハルがあるアグラの街を歩いていたときのこと。若いインド人の男性に声をかけられました。「君、日本人？日本にすごく興味があるんだ。話を聞かせてくれないか。もしよければ、昼ごはんをごちそうしたい」。ちょっと怪しい気もしたのですが、見た目はごく普通です。話し方も丁寧だったので、つい好奇心に負けて彼の家について行ってしまいました。

彼の家で昼食をごちそうになり、家族とも少し会話をし、なんだかんだで楽しい時間を過ごしました。そしてそろそろ帰ろうかという頃になって、道

を歩いていると急にお腹が痛くなり、目まいもしてきて、道端にしゃがみ込むことに。すると、なんとという偶然か、さっきの彼がバイクで通りかかり、「どうした、大丈夫か」と声をかけてきました。体調も判断力も弱っていた私は、彼の言うがままにホテルに連れて行かれ、更に彼が呼んだというお医者さんの診察を受けることに。ひどい下痢と発熱で、脱水症状もあり、ホテルの部屋で点滴まで受けることになりました。

そのときは「インドに慣れない体が、生水や手づかみの食事で作られたんだろう」と思っていたのですが、後になって冷静に考えると、すべてがあまりにスムーズで、タイミングが良すぎたような気がします。あれは、最初から仕組まれていたのでは……？と思うなくもないのです。ただ、実際に助けてもらったのも事実で、親切だった彼を疑うのは申し訳なく、30年近くたった今でも、真相は私の中で謎のままです。

そして、もっと衝撃的だった出来事が、カルカッタの南にあるブリーという町で待っていました。海に面したのどかな漁村で、かつてはヒッピーの聖地とも呼ばれていた場所です。当時も、何人かの日本人バックパッカーが“沈没”して、昼間からハッシッシを吸って海を眺めている、そんな場所でした。

そのビーチを歩いていたときのこと。ふと見ると、野良犬が何かをむしゃむしゃと食べているのが目に入りました。遠目にはアザラシか何かの死骸かなと思ったのですが、近づいてみると、それはなんと人間の溺死体でした。腹が大きく膨らんで、服を着ていなかったため、そう見えたのでしょう。犬はその喉元に食らいついたまま、私が近づいても一心不乱に食べ続けていました。後で宿の人に聞いたところによると、漁に出て帰ってこなかった地元の漁師のようでした。

「インドに行くと人生観が変わる」とよく言われますが、私の場合、人生そのものは特に変わりませんでした。ただ、海外への好奇心と冒険心が、更に大きくなった気がしています。

（東北大学・金属材料研究所）
〔2024年度仁科記念賞受賞者〕